



花かつみの里 2024



No. 39

「トランポリン教室」



1月31日(金)と2月3日(月)に分けて、全校生を対象に「トランポリン教室」を実施しました。

「トランポリン教室」は、『子どもたちの多様な動きづくりや体力の向上を図ること』を目的とした教育活動です。

郡山トランポリンクラブの指導者を講師としてお招きして指導していただきました。



加害者・被害者にならないために

1月31日(金)に6年生を対象として、「法教育」を行いました。

法務少年支援センター福島「福島少年鑑別所」の首席専門官をお招きして、

性に関する問題に関して、加害者、被害者というようなトラブルを未然に防止するためには、**相手の気持ちを考えることが重要であること**

など、法の基本的な考え方や相互尊重のルールとしてある法について学びました。



～ちょっとだけ参考になる話～

「ピグマリオン効果」とは？



「ピグマリオン効果」という言葉を聞いたことがあるでしょうか？

簡単に述べると、「人はそのように扱われるとそのようになる」ということです。

例えば、子どもを「ダメだ、ダメだ」と毎日叱ったとします。その結果、子どもは本当にダメになるというのです。

そういう理論は、次のような実験の結果から出されたのです。

アメリカの著名な精神科医のマックギニスという人が子どもの成績がふるわないのは、大人が「この子どもたちはどうせできない子どもだ」という考えのもとで生活をしているからではないか、という予測をしたというのです。

その予測のもとで、次のような実験をしました。

数人の子どもたちの名前を大人に教え、「この子どもたちは、きっと伸びる子どもたちですよ。テストでは、すばらしい結果を出しましたから」と伝えました。

実は、それはうそでした。その数人の子どもが特別に優秀だという根拠は何もなかったのです。

しかし、次の学期になってテストをしたら、驚くような結果が出たのです。

伸びるといわれた子どもたちは、本当にすばらしい伸びを見せたのです。

これは、いったいどういうことかということ、子どもの成長というのは、子どもの能力だけではないということなのです。

つまり、この実験でいえることは、大人の子どもの接し方が異なっていたということなのです。

“この子どもは伸びる”という暗示が与えられると、大人は“伸びるはずだ”という意識でそれらの子どもに接したのだらうというのです。

だから、その結果、期待通りの成績を修めたのでしょ。



ですから、うちの子はきっと伸びるであろうという考えで育てれば、子どもはうんと伸びるというのです。【話のネタ本】(小学館)より抜粋